

「死と復活の予告」

2022年02月21日

それからイエスは、人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちによって排斥されて殺され、三日の後に復活することになっている、と弟子たちに教え始められた。(マルコ福音書8章31節)

それから、群衆を弟子たちと共に呼び寄せて言われた。「私の後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を負って、私に従いなさい。」(マルコ福音書8章34節)

主イエスは「あなたがたは私を何者だと言うのか」と問われた。ペトロが真っ先に「あなたはメシアです」と答えた。このペトロの「キリスト告白」を境にして、苦難と死の道へと向かっていく。まず主イエスは、「人の子(主イエス)は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちによって排斥されて殺され、三日の後に復活することになっている」と、苦しみを受け殺されるが、三日後に復活するとはっきりと予告された。するとペトロが、慌てて主イエスを脇へお連れして、いさめ始めた。ペトロにとって、主イエスが宗教的権威者たちから苦しみを受け、殺されることなどは想像できないことで、更に、死んで復活するなどということはあり得ないことであった。彼は、「先生、そんなことを言っただけではありません。皆の笑いものになってしまいます」と、真顔でいさめた。彼の気持ちはよく理解できる。ところが、主イエスは振り返って、弟子たちを見ながらペトロを叱って、「サタン、引き下がれ。あなたは神のことを思わず、人のことを思っている」と言われた。「サタン、引き下がれ」という言葉は、これ以上ない激しい叱責で、大きな怒りをペトロに向けている。死から復活することは神のなさる業で、ペトロは、主イエスの言葉のように、人のことを考え、神のことは全く考えていなかった。復活は神のことを思うことによって、受け入れられることなのである。

主イエスはペトロを激しく叱責した後、群衆を弟子たちと共に呼び寄せ、「私の後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を負って、私に従いなさい」と言われた。この言葉を告げるために、弟子たちをフィリポ・カイサリアまで、連れて来たのではないか。主イエスの言動に心を引き付けられ、ひたすら従って来た弟子たちと群衆に、三つのことを命じておられる。①「自分を捨て」る。自分自身であることを捨て去ることではなく、自分の利益や栄誉を求める自己を否定することである。福音の真理を生き、証しする目的のために、自己否定するのである。②「自分の十字架を負う。」十字架は主イエスが負った苦難で、同じ苦難の道を進むようにとの招きである。苦難は自分のためと、他人のための苦難があるが、誰でもどんな苦難も負いたくない。しかし、自分に負わせられた苦難を避けず負えと命じられた。③「私に従いなさい。」信仰に熱心に燃えていても、しばしば道から外れることがある。だから、常に主イエスに目を向け、従い続けることが大事である。

地上における命を得ようと思う者は、それを失うが、主イエスのため、福音のために命を失う者は、神からの命に与る。現世的な益を得ても、命を損なうなら、何の得があろうか。どんな代価を払っても、買い戻すことはできない。近、現代史は、科学を基礎にして、人間の欲望を爆発させ、多くのものを得て来た。しかし今、そのために、失ったものの多さに気付かされ、取り返しがつかないところまで来ている。主イエスの言葉の真実が映し出されているのではないか。しかも、主イエスの再臨による歴史の終わりに与えられる永遠の命という視点から、今の生き方を諭し、命じておられる。